

## 海を照らす灯台のなかまたち (23)

### <最終回>

灯台にはロマンがあり、ドラマが生まれてきました。

最近の愛媛新聞で紹介された「あのこと映画があった」木下恵介（きのした けいすけ）監督の「喜びも悲しみも幾年月」は、灯台職員（灯台守）の夫婦を主人公に四半世紀にわたる家族の歴史を描いた作品です。

「おいら岬の 灯台守は 妻と二人で……」と誰もが口ずさみ、当時の人々は知らない人はいないだろう。

灯台には灯台守がいて、佐田岬灯台は勿論、大崎鼻灯台でも常駐されていた。

観音埼灯台を始め北海道から九州まで4年毎に移動し、幾つもの灯台をいくつもの灯台を回って、灯台守の使命や彼らが働く生活環境をこの映画で教わることができた。

「……沖行く船の 無事を祈って 灯をともし 灯をともし」

今はもう遠隔監視に切り替わって、無人化され灯台守はいなくなってしまったが、この映画で灯台の懐かしい話を再現することができた。

灯台にも鉄道のようなマニアがいるという。

さまざまなタイプがあるようですが、国内の三千基を越す灯台を巡るお遍路タイプ、写真や趣味で訪れるタイプ、特に灯台の瞳ともいえるレンズを愛好される方もいるのだそう。

ただ灯台も衛星で位置情報がわかるGPSの普及によって廃止の流れにある。

緊急時の備えとしての重要性や歴史的、文化的価値から保存の大切さが訴えられています。

相次ぐ災害で公衆電話が役立っているなど、一世代前の手段を採算や効率だけで評価してはならないだろう。

長年にわたり光を絶やさず、航行の安全を守ってきた灯台、いろいろな角度から光をあてることで魅力はより磨かれるのではないだろうか。

これも愛媛新聞に「灯台からの響き」という、宮本 輝（みやもとてる）さんの小説が数年前に連載されました。

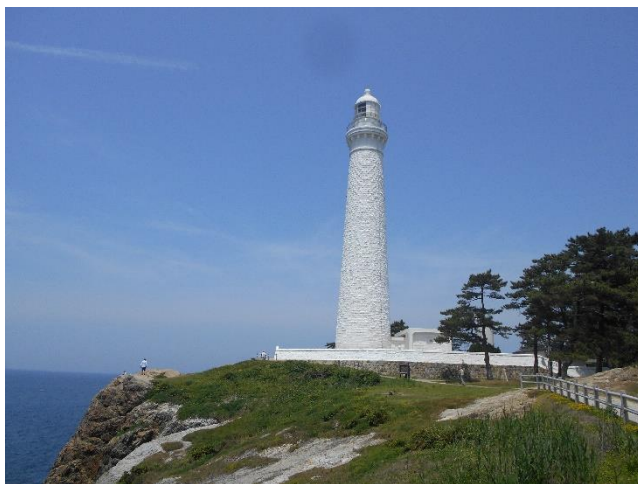
灯台を巡る大学生の話で、出雲日御碕灯台が何度も出てきており、同灯台は出雲大社の先にあります。

出雲大社では、西暦2000年に巨大な柱跡が発見され、この発

見から以前は高層神殿であったものと推測されていて、この神殿がなぜ高層でなければならなかった理由についても、弥生時代の壺から紐解かれてきており、同壺に描かれた絵には「太陽・高層神殿・船」が描かれていることから、この高層神殿は、灯台の役目があったのではないかと推測されています。

出雲日御碕灯台は、日本一高い灯台としても知られています。

出雲日御碕灯台（島根県）



また、この小説の中に青森県の尻屋崎灯台について、このように

表現されていたのが心に残っています。

「霧の中に建つ、優美と言ってもいい姿は、一人の人間の長い過去からの物語が醸し出されているかに思えた。

動かず、語らず、感情を表わさず、海を行く人々の生死を見つめてきた灯台が、何ものにも動じない、人間そのものに見えた。

空の色と海の色と霧の色によって、灯台は自らの色を消してしまったかに見えるが、びくともせず、日が落ちると点灯して航路を照らし続ける。

多くの苦勞に耐えて生きる無名の人間そのものではないか・・・」

尻屋埼灯台（青森県）



「海を照らす灯台のなかまたち」で近くの灯台を紹介するなかで、灯台の虜になってしまいました。

テレビの旅番組などで灯台が映し出されると、もう釘付けになって見入ってしまいます。

観音埼灯台などよく出てきます。

防波堤灯台右側の赤灯台、左側の白灯台もよく目にします。

今回で終了とします。

宇和島海上保安部の皆さん、吉田町で開催された「灯台写真パネル展」から今日まで、沢山の資料のご提供や色々のご教示くださりましてありがとうございました。感謝申し上げます。

★「大八車」No.237（令和3年10月10日）掲載分



牛鬼